

---

# 風見鶏は/一体なにを/見つめるか

rikka

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風見鶏はノ一体なにをノ見つめるか

### 【Nコード】

N5552F

### 【作者名】

rikka

### 【あらすじ】

受験という一つの峠を迎えた藤枝晶はやりたいことも、夢も何一つなかった。ただ彼はひたすら過ぎていく日常をなんとなくでもどこか必死に生きていくだけだった。

## prologue

「はあ」

僕は朝っぱら盛大なため息をついていた。

進学校の受験生ともなると、どんなに普段バカ騒ぎが好きなヤツでもある程度は落ち着く。

そのかわり、何ともいえない独特の緊張感が朝から教室内に漂っている。

でも、ピリピリとしたこの僅わずかな緊張を含んだこのもの静かな雰囲気わづが僕は好きだ。

かと言って、別段騒がしいのが嫌いというわけじゃない。

話かけられれば勿論返事はするし、皆が楽しそうに騒いでいる場をシラケさせるような野暮な真似はしない。

『無口で変なヤツ』 というのが僕のクラスでのポジションであり、半ば意識的にしてきた僕自身のあり方だ。

「おはよーシヨウくん。相変わらず不景気そうな顔してんのな」  
しかしその『無口で変なヤツ』に開口一番、そう話しかけてくるヤツがいた。

飯島は人好きのするニカツとした笑顔で、少し茶色く染まった前髪を揺らして僕の返事を待っている。

この会話を、一体どれだけ重ねてきたんだろう。  
自分からはあまり話しかけない僕に、よくもまあ飽きずに毎朝挨拶してくるものだとは心底感心する。

そんなことを考えている間に飯島は「反応なしか…」とぼやくと、女子の輪に入るためか僕に背を向けた。

「おはよ、飯島」

飯島の視線が外れるのを感じた僕は、ヤツの背中にその言葉をぶつけた。

それを聞き取ったのか、飯島はその場に少しだけ立ち止まり、「やれやれ」とでもいうような仕草を背中越し見せた後でもう一度こちらを振り返り、苦笑を浮かべてそのまま女の子の輪に入っていた。

それから数分後、いつの間にか来ていた陰の薄い担任の、定刻通りの「ホームルームをはじめます」というお馴染みの文句で、無駄に長い時間がはじまった。

自分の名が呼ばれるのを確認すると、僕は視線を窓の外に移した。空は見ていてすがすがしいくらいの青色。

ああ、今日も学校はこんなにも退屈だ。

## prologue (後書き)

恥ずかしながら初投稿ですので、ご意見・感想などをいただければ  
今後の参考にさせていただきます。

拙い文章ではありますが、温かい目で見守ってください。

いつからだろう。日常がつまらないと感じはじめたのは。

今何をしたいというものがわけでもなく、特に目指す目標があるわけでもない。

ただただ、のんびんだらりと時間が過ぎていくのも待っているだけ。

そのスタンスを取り続け、はや数年。

記憶の欠片しか残っていないけれど、何とかという『戦隊モノになりたい』とか『サラリーマンになりたい』と、何も考えず、どういうものかも知らず、恥も外聞もなく言えていた過去の自分が羨ましいと思えるくらいだ。

でも、大学進学を控えた 言わばちよつとした社会進出を控えた受験生にとって、進路が決まらないというのは致命的な問題だったりするわけだ。

そして、ほら 。 こういうときに限って進路調査なるものがある。

担任が、のそのそと用紙を配り始める。

提出期限は今週末まで。

配りながら担任はそう言った。

一年前ならいざ知らず、今この時期にそれが出せないとなると恐らく呼び出しをくらうことになるだろう。

夢もなければ目標もない。そんな僕にとって進路調査はまさに絞首刑の台で、提出期限はその階段のようだった。

僕は本日二度目となるため息をついたのだった。

そうそう。一つ大事なことを訂正しておくのを忘れていた。

飯島は僕のことを『シヨウ』君などと呼んでいたけど、それは僕の本名じゃない。

まあ、自分の名前にそれほど愛着を持っているわけじゃないからあいつには好きなように呼ばせているけど僕の本名は『藤枝晶』ふじえあきらという。

高校三年、成績は…まあ、余り他の人と比べたことがあるわけじゃないからよくわからないけど、それほど悪くない方なんじゃないかと思う。

特に何かしたいわけでもなかったからずっと帰宅部だった。

しかもゲームとかテレビ番組とかもあまり興味がなかったし、暇があれば読書か勉強をしていたし、なによりアルバイトが一番のウエイトを占めていた。

でも、なによりも大きな理由が『遊んでいられる余裕はなかった』という事だと思う。

母子家庭で育つ身としては、なるべく親に迷惑はかけたくなかったのだ。

机の片隅に『調査用紙』を置いたまま、僕は授業を受ける。教科書を広げ、ノートを広げ、そしてプリントを隠すようにして。

でもその存在を視界から消さないようにする。

だけど、机の上に大きく広がる教科書よりも、『調査用紙』の方が圧倒的な存在感を持っていた。

自分の進路なんて、考えたこともなかった。

でも、本当にどうしようか。

不意に、ちよんちよん、と腕に何か刺さる感覚がした。

反射的に、その感覚がする場所の右腕を見る。

そこにはシンプルな、けれどもどこか愛着のわくデザインのシャーペンが僕の腕をつつついていた。その先 僕の右隣を見る。

隣の席の女の子 西村さんが「前、前」と小声で囁きかけていた。

「えっ」

我ながらなんとも間抜けな声をあげ、黒板の前に立つ人物をみた。

「藤枝え、何をボーツとしとるんだ。受験生だろっくに、シャキッとせんか、シャキツと」

「……すみません」

「まあいい。この問題、答えてみる」

ゴン、と黒板を叩き、解くべき問題を示す数学の杉山。

怒っている…と言うよりは呆れている様子だ。

だけど問題すらも見てないのに、解ける訳がない。

仕方ないので、解らないと素直に言おう。

また何を言われるかわからないが。

そう結論づけたとき、僕の机の上にノートの切れ端が飛び込んできた。

パツと見た感じでは、いくつかの記号と数字、時折文字が書いてあ

る。

「97ページの問3」と、西村さんがそつと囁いた。それでようやく『切れ端』の正体が何か分かると、僕はありがたいと西村さんに小さく呟いた。

幸い、例題を少し難しくした程度の基礎問題だったので時間をすこしかければ解ける問題だ。

でも、気難しそうに腕を組んで今か今かと僕の返答を待っている杉山先生が

その『少しの時間』を待つてくれるとは到底思えなかった。

しかし、さすがというべきなのか、例の『切れ端』には問題の在り処と答えが、丁寧な字で書いてあった。

それを文字通り読み上げると、杉山は面白くなさそうに「座つてよし」と僕に告げた。

もう一度西村さんに感謝をし、僕は先生の言った通り席に座った。

後から聞いた話だが、それからあとの授業も心此処に在らずという言葉がぴったり当てはまる感じだったらしい。

唯一の救いは一度も当てられなかったということだろうか。

ボーっとしてたら、いつの間にかお昼になっていた。

まあそれでも、授業毎に教科書をちゃんと黒板の要所要所を写すことくらいはしている。

そして、ちゃっかり目の前には弁当箱が広げられている。

「しっかしさア、今日おかしくね？シヨウ君らしくもない」

目の前の席にどかっと座り、購買の人気No.1の焼きそばパン

をもしやもしやと豪快にパクつきながら飯島は言った。  
何とも幸せそうな顔だ。

コイツには悩みなんてあるのだろうかと思わず疑ってしまっただけに。  
「でもさ、ホントにポーツとしてたよな」と、隣で西村さんは小さな箸で小さなお弁当をつつきながら言った。

「……そんなにポーツとしてたかな」

「自覚無えの？」

自覚がないわけじゃない。

僕は一つため息をつく、観念したように机の中にしまった例の紙を机の上に置いた。

「進路の紙？」

二人は声を八もらせて、まじまじと僕の顔を見た。

「これが、僕がポーツとしてた理由……かな」

「藤枝クンで、進学希望じゃないのッ!？」

「えッ、ああ。うん」

YesともNoとも言えない曖昧な返事をする。

西村さんは、啞然とした様子で僕を見た。

飯島は相変わらず、しかしどこか納得した様子で焼きそばパンをむさぼっていた。

「じゃあ、前は何て書いたの？」

興味深々という感じで西村さんは聞いてくる。

飯島は「やめとけ」と一言言った。

が、すでに好奇心というスイッチが入った西村さんには無意味な言葉だったようで

じっと僕の返答を待っている。

もう何度目かもわからない溜息のカウンターを一つ増やし、僕は「……就職希望」と答えた。

「なんで!? 藤枝クンの頭だったらいい大学狙えるじゃん」

「大学に二人もいくだけの余裕がうちにはないんだよ」

頭いいって言われてもなあと照れくさくなりながら、苦笑して言う。

できればここから先の話したくないなあと思いつながら。

「どうして？お父さんとか、学費だしてくれないの？」

「もう少し空気読めよ…、京子」と飯島が大きく溜息をついた。

西村さん一瞬何のことかわからないといった様子で西村さんは飯島を見て、再び僕のほうに視線を戻す。

「……………もしかして私、やっちゃった？」

飯島が呆れた様子で「うん」と頷いた。

「あちゃー」とでも言いそうな様子ですまなそうに僕のほうを見てくる西村さん。

自分でも今どんな表情をしているのか、なんとなくわかる。

自分では苦笑したつもりだけど、西村さんの反応を見る限り不機嫌な顔をしてるんだろう。

まあ、ここで無理に話題を変えてもかえって気まずさは残ると判断した僕は、苦々しい棘がココロをチクチクと刺激しているのを感じながら言った。

「父親はいないんだ」

## prologue 4

前もって言っておくが別に親父は死んだわけじゃない。俗にいう、離婚というヤツだ。

理由は簡単だった。

息子の僕から見ても器量良しで、だけど割と引込み思案で内助の功という言葉が似合うような母さんを尻目にあるうことか親父は浮気をしたのだ。

毎晩、母さんは我慢を知らない子供だった僕や妹だけに先に食事を取らせ、自分だけはじつと親父の帰りを待っていた。

そして、親父は決まって香水の匂いを身体に纏まとわせて帰ってくる。ほとんど日付を越えて帰ってくるが多かつたらしいが、男親だけに息子の僕を可愛がっていたから僕は物心つくまで気が付かなかった。

それを知ったのは本当に偶然だった。いつもなら寝る前にトイレに行く僕が、その日に限っては行かなかっただけの話。

当然、そのしわ寄せが夜中にくるのは目に見えている。

そして見た。見てしまった。

じつと親父の帰りを待っている母さんの目尻に涙が浮かんでいるところを。

そして、時折溢れそうになる涙を拭う姿を。

どうしたの？なんでないてるの？

眠い目を擦りながら、幼いぼくはそう聞いた。

でも母さんは「目にゴミが入っちゃっただけよ。心配してくれてありがとうね」と気丈にも笑って僕に早く寝るよう急かした。

子供心なら、それが今日昨日のことじゃないことくらいは、なんとなくわかった。

たぶん、それからだ。

親父に対する僕の態度が変わりはじめたのは。

『ぼく』に向ける顔、母さんに向ける顔。  
そのギャップが怖くて、父さんに対してよそよそしく接するようになつた。

どうしてもっと早く気付くことができなかつたのか。

母さんのために何かできることはなかつたのか。

勿論、何のチカラもなかつた当時のぼくに何か出来たとは思えない。

だけど、今更なだけにそう思わずにはいられなかつた。

喉に刺さつてずっと取れない魚の大きな骨のような。

あるいは礫にされ、胸に杭を打ち付けられ続けているような。

そんな記憶が頭の中で再生される。

でもそれで今が不幸かと聞かれればそうではない。

昔と比べれば、母さんは見違えるように笑うようになったし、疲れながらも充実した顔で帰ってくる母さんを見ると、僕ら兄妹まで、どこか満ち足りた気分になる。

なんだ、結局何の問題もないじゃないか。

確かに今の生活は決して楽じゃないけれど、それは金銭的な話。心はそれなりに充実している……と思う。

僕は苦笑して西村さんの顔を見る。さっきと全然変わらない、心底申し訳なさそうな表情をしていた。

不謹慎かもしれないし、女の子に対しては言っちゃいけないとは思っただけれど、その顔が何故か面白くて吹き出してしまった。

「ちよ、何よう」と西村さんは頬を膨らましてこちらを睨む。

それに飯島が「や。京子がそんなことしても似合わないから」と笑

い転げる。

「失礼ねー」

顔を赤くして、西村さんは飯島の肩をバンバン叩いた。

その二人のやり取りが、やはり面白くて僕はまた笑う。

「だいたい。女の子の顔を見て笑うなんて失礼だよ、藤枝くん！」

「ッ。ごめん」

肩を小刻みに震わせ笑いが込み上げてくるのを必死に絶えながら僕は謝った。

「それ、全ツ然謝ってないから」と痛そうな張り手が飛んできたのと同時に午後からの授業開始の予鈴が鳴る。

気が付けば、もう結構な人数が座り始めていた。

飯島が元の席の持ち主が座りたそうにしているのに気づいて「さて、俺も次の授業の準備、しますかね」と立ち上がる。

西村さんは背を向けた飯島に「ばーか」と一言。それから僕に「ごめんね」と囁いた。

そこには先ほどの気まずさはほとんどと言っていいくらい残っていないかった。

午後の授業が終わる。

後はホームルームを残すのみで、すでに帰る準備をする人、セミナーの学校では、授業後に行われる受験対策の補習授業をそう呼ぶ。の準備をする人、部活の準備をする人に分かれている。

僕はその三つの中の一番目にあたる。まあ、部活にも参加はしていないし、大学進学を目指そうと思ってはいないので当然といえば当然だ。

とりあえず、ほぼずっと机の上に出されていた、悩みの種である進路調査票を丁寧に、大切にリーフケースの中に入れる。

提出期限は今週末までだけど、いざとなったら『就職希望』とでも書いておけばいい。呼び出されたら……まあ、担任もある程度こちらの事情を把握しているだろう。だから、『家庭の事情』を説明してやればいい。

悩みではあるが、とりあえず今は今出来ることを、しなければならぬことをするだけだ。

担任が教室の扉を開け、連絡事項が『進路調査票を書いてくる』以外はしないことを告げて再び去っていく。

ガタガタと騒々しい音が鳴り、周囲のクラスメイトたちが各有各の目的地へと動き出す。

もちろん僕もその流れに乗っかり、外へと出る。もっとも、僕は帰宅組とは言っても帰宅するわけじゃなくてこのままバイト先へ直行するわけだけだ。

「おーい。シヨウ君！ シヨウ君やーい」

誰だ。と考える必要はない。

僕の知る限り、シヨウくんなどところまで馴れ馴れしく呼ぶヤツはこの学校で一人しかいないからだ。

僕は足を止め、溜息をつきながら振り返った。

「……なんだよ、伊織」

「うわ、機嫌悪ッ!? っていうか名前で呼ぶなよ、名前でさア」  
「それをお前が言うか……。僕だって、『シヨウくん』て呼ばれる  
のあまり」

「だってよお。俺としては『シヨウくん』って言うのが一番しっく  
りくるんだもんよお、仕方ねーじゃん」

『しっくりくる』で改名されてたまるか、と心の中でツッコむ。

でも飯島の気持ちもわからないでもない。現に、もうコイツから  
『シヨウくん』と言われることに慣れた。

「というか、『晶』<sup>あゆみ</sup>という名前で呼ばれた日には、もしかしたら正  
気を疑ってかかるかもしれない。

「で、用があるんだろ?」

そう聞くとさっきまで唇をとんがらせていたのがウソのように、  
一瞬でニカツとした笑顔に早変わりする。

その言葉を待ってましたと言わんばかりの反応に、僕は苦笑する。  
「あのよう、これからバイトだろ?」

うん、と僕は頷く。

「今日、『俺は夜まで手伝えないから』って、親父に言つといてく  
れないか?」

「どうして? っていうか、そうか。セミナーか」

「そそ。今日あること完ツ全に忘れててさア。『今日も仕込みから  
手伝うから』って言うってきちまったんだよ」

「な? 頼む」とお願いしますのポーズをする伊織<sup>いおじ</sup>。

「別にいい、気にするな。他に大将に伝えることは?」

「特にはない! んじゃ、そういうことだから。頼んだぜ、『シヨ  
ウくん』」

「おつ。お前こそ、しっかりやってこい」

おつ、と活きの返事をして伊織は走り出す。

僕は飯島の背に手を振った。

外見は一見すると軽そうなヤツだが、伊織が実はすごく真面目な

ヤツだということは、僕だけが知っていることじゃない。

それに、成績という面では僕は伊織に遠く及ばない。アイツは夢がなんなのかは『時期が来るまで待つてくれ。お前に一番に話すからよ』と言つて教えてくれないけどその『夢』に向かつて着実に走っているのだからはよく分かる。

校舎に走つていく飯島が眩しく見えるのは、きっと逆光のせいばかりじゃない。

「さて、僕も急がないと間に合わない」  
校舎に背を向け、僕も走り出した。

Progressive (後書き)

感想などがありましたら、よろしく願います。  
では。

prologue 6

駅から徒歩十数分の距離に知る人ぞ知る居酒屋『のんだくれ』はある。

市街にも近く、駅にも近いと言うことで、飲み屋としての立地条件は決して悪くないのだけれど、低価格で満足のいく居酒屋や、そう言ったお店が軒を連ねている昨今では『知る人ぞ知る』程度のお店ではやはり分が悪い。まあその分、常連さんやその連れ、あるいはその常連さんの口コミで来るお客さんで、連日それなりに賑わっているけれど。

「すみません、遅れました」僕は息を切らしながら『準備中』と書かれた扉をあける。

「おう、シヨウちゃん。来て早々悪いんだけどよう、チャツチャツと着替えて仕込み手伝ってくれねえか」

何時ものようにカウンターに面した厨房に立った、ガタイのいい『大将』が僕を出迎えてくれる。

「ウチのドラ息子は何処ほつつき歩いてんだ」と苛立った様子で大将は毒づいた。

僕は急いで厨房の手前にある部屋に行き、着替えながら、大将に聞こえるくらいの大きさで叫んだ。

「あ。伊織からの伝言で『今日は仕込みを手伝えない』だそうです」「なにい？アイツ」

「今日、セミナーの日なんですよ。でも、それを大将に言うの忘れてたみたいで……。そういうわけで、伝言を預かってきたというわけです」

「シヨウちゃんがそういうなら信じるけどよ。アイツ勉強なんてできるのか？」

「伊織は相当頭いいですよ？」

景気のいい、包丁がまな板を叩くリズムが一瞬狂う。

「シヨウちゃん、気い遣わなくていいぜ。どうせほら、アレだ。成績悪いヤツが受けるっていう補習だろう？」

オレも昔よく世話になつたわ、と豪快に笑いながら大将は言った。自分の息子だろくに、容赦がないなあ、と苦笑いを浮かべる。

「バカ野郎、オレの息子」だから」だ」

着替え終わって厨房に出ると、そこには豪快に胸を張って、がははと笑う大将がいた。

僕はまた苦笑いだ。

「大丈夫ですって。伊織は普段の様子からじゃ想像出来ないかも知れませんが結構努力してますから」

そういうと、大将はくすぐったそうに「そうか」とだけ呟いた。

なんだかんだ言いつつ、大将だって伊織のことを信用しているのかもしれない。

「うし。開店までもう少しだ。シヨウちゃん。アイツのいない分まで、今日は働いてもらうぜ？」

「はい！」

そうして日が暮れ始める頃には仕込みが終わり、茜色した空が完全に真っ黒になるころには、客足が徐々に集まり始めた。

「おい、シヨウ君。生中追加ねー。あとニッコロと、ブリ大根お願いねー」

「はい！喜んで」

「坊主、こつちもニッコロと…大将特製の角煮頼むわ」

小さい店舗 と言ってしまうえば大将に本気で殴られかねないけどで注文が飛び交う。

飛び交う注文の中で『シヨウくん』や『坊主』と言われているの

はもちろん僕だ。

アルバイトをはじめた当初、慣れない接客業におどおどしていた僕に、大将が勘違いしたまま『シヨウ』と言ったのが運の尽きだった。

自分の名前云々(うんぬん)よりも、仕事を覚えることでもいいっぱいいっぱいだったので、一週間もしないうちに常連さんに『シヨウ』と、めでたく顔と名前が覚えられてしまったというわけだ。

まあ、せつかく名前と顔を覚えてもらったんだし、ここで敢えて自分の名前を訂正するのも野暮か。と今では開き直っている。

今日も見渡せば、居酒屋『のんだくれ』には多くの顔見知り常連さんが来ている。

いつも通りと言えばいつも通りだ。

居酒屋チエーンが至るところにあり、個人営業である『のんだくれ』も営業が大変なのでは？とよく聞かれるのだけど、大将から言わせれば『屁の河童』らしい。

居酒屋チエーンが、どこの店舗でも変わらない味・変わらないサービスを提供する万人受けする

居酒屋とするなら、『のんだくれ』は一店舗しかないけれど味はまさにオンリーワンで、サービスも決して悪くない 固定客がつく事を前提とした居酒屋だ。

チエーン店みたいによくのお客は入ってこないが、その分一人のお客がそれなりの額のお金を支払っていく。

言ってみれば、一人で飲んだり、じっくり誰か飲むとは、『のんだくれ』のような店舗が最良なのかもしれない。

ビールはもちろん、大将のコネで、店の大きさのわりに珍しい地酒がたくさんあるし、大将が作る料理もそういってお酒に合うように作られているのか、常連さん方にも評判は上々だ。中でも、先ほどから注文が絶えないニツコロ 芋の煮っ転がしや、角煮などは絶品だ。

きゅると、お腹がなる。見ていたらなんだか食べたくなってし

まった。

ふと時計を見ると、時刻はもうすぐ9時になるうとしていた。そりやお腹がすくはずだ。とちよつと顔を赤くしながら僕は笑った。

「ふいー、ただいま」

ちようど9時になると、裏口の方で伊織の声がした。それから数分も経たないうちに僕と同じ、板前風の青い服を着た伊織が姿を表した。

「おつかれッ！ もう上がっていいぜ」

勉強で疲れているという素振りなどみせず、相変わらず笑って伊織はそう言った。

とりあえず、大将に目配せする。

するとそれに気づいた大将も「もう上がっていいぞ」と言ってくれた。

僕は頷いて、服を着替えにむかった。

帰り際、伊織の母・涼子さんが手招きをしてきた。

「お疲れ様、晶くん」

と涼子さんはにっこりと微笑む。

「あ、そうそう。今日もこんなので悪いんだけど、お家で食べて？」

と芋の煮っ転がしと角煮、他にもたくさん料理が入ったタツパを渡される。

好意に甘えてそれを受け取る。こういう場合、むしろ断るほうが失礼なのだということに僕は涼子さんから教わった。

というか、この人の笑顔は時々有無を言わさぬ迫力があるため、断れないというほうが正しい。

ガラスと裏口の扉を開ける。瞬間、外のひんやりした空気が肌を撫でる。

初夏とはいっても夜はまだまだ肌寒い。

僕は、制服のポケットに手突っ込み、涼子さんにもらった料理と、勉強用具の入った鞆かばんを持って、月と蛍光灯が照らす夜道をゆっ

くり歩いた。

『のんだくれ』から駅に行き、電車で駅二つ乗り継いで、駅から徒歩数十分という距離に、閑散とした住宅地がある。

住宅地とは言っても家から家までの距離が徒歩3分くらいの距離があり、まわりを見れば小さな田んぼや畑が並んでいる、実に何もない、今では逆に珍しい場所だ。

正直言つて駅にも、そして市街にも遠い不便な土地だけれど。まあでも。住めば都という言葉もあるようにこの物静かで、他の場所と違つて時間がゆっくり感じられるこの場所が、自分と実に合っているような気がする。

その中に『藤枝』と書かれた表札のある、随分古めかしい一軒家がある。

それなりの土地の広さはあるけれど、立地条件など、色々な問題から市内の一般的な借家と比べると格段に安い家賃の一軒家だ。

昔ながらの造りというかなんというか、典型的な木造建築で、築50年ほどの歴史を持ちながら

『まだまだ若いモンには負けん』とでも言つてそうなしつかりした造りがされている。

近所の猫の溜まり場だったり、ちょっと腐りかけている部分があるのも一つの愛嬌というものだ。

ガラリと横開きの戸を開け、中に入る。その音が聞こえたのか、「おかえりいー」と実にぼやんとした声が奥から聞こえてくる。様子からして、まだ母さんは仕事から戻ってきていないようだった。

僕は今日何度吐いたのかもわからない溜息の回数をまた増やす。

食卓まで行くと、やはりその声色通り眠そうな様子で突っ伏している妹・一葉の姿があった。

時計を見れば、もう10時過ぎ。

「あのなあ、眠いのなら寝てていいっていつも言ってるだろ？」  
その様子に呆れ、僕は口を尖らせていう。

まったく……なんのために合鍵を持っていると考えているんだ、我が妹は。

この辺はまだ治安がよいとはいえ、僕がいなければ母さんと二人、母さんが帰ってこなければ実質一人になる。もう少し……その、兄としては危機感を持って欲しいと思うのだ。

「お兄い……ご飯は？あたしは勝手に食べちゃったけどさ」

「まだ。ほれ、食べるか？」

『のんだくれ』女将の涼子さんにもらった、煮っ転がしなどの料理を机の上にだす。

料理はすっかり冷めてしまっているけれど、それでもまだ十分美味しそうだ。

お皿に移してレンジに入れ、すこし温める。まもなくレンジ内から良い匂いがたちこめ始める。

それに、一瞬「うっ」とたじろぎながらも「いらない」と断った。電子レンジのBEEP音がなり、温まったことを知らせてくる。

炊飯ジャーの中にあるご飯をよそう。いつ炊いたのかは知らないが、まだほのかに温かい。

「いただきます」と、行儀よく手を合わせ箸に手をつける。

その様子をじっとりとねめつける一葉。

……そんな目で見られたら、なんだか僕が悪者みたいじゃないか。でも、やはり昼以来胃になにも入れていないので、目の前の美味しいものを食べるといふ基本的欲求には勝てないわけで

目の前にある、角煮を一口で頬張る。

うん、美味しい。

おいしいモノを食べると頬が緩むというけれど、今の僕の表情は

まさにそんな感じだ。

その様子を見て一葉が「ああ」とか「うう」とか唸っている。そんな顔をするなら食べればいいのに……と僕は思うのだけれど、そういうわけにはいかないのが女の子という生き物らしい。

まあ、それでも人が美味しく食べてるところに「あー」とか「うー」とか言われていると、すごく後ろめたい気持ちになるわけだ。

「一葉……。口開けてみ？」

「で、でもこの時間帯に食べると絶対太るもん」

予想通りの答えに、僕は思わず溜息をつく。

「あのなあ。ちよつと食べたくらいでそんなにすぐに体重は増えな  
いっての」

「じゃあお兄は、『のんだくれ』の美味しい角煮を一口食べただけで満足できる？」

それを言われると、確かに僕もつらいところがある。確かに、コ  
レを一口でも食べればご飯が欲しくなるし……と迷っていると「で  
しょ？」となぜか得意気な顔をしている一葉がいる。そういうとこ  
ろの危機管理だけはしつ  
かりしているらしい。  
まったく。

「……………でも俺は食べるぞ」

もう勝手にしてくれ、というような感じで、僕は『僕』の晩御飯  
に集中する。

それでも、やっぱり僕が一口食べる度に我が妹は「あー」とか「う  
ー」とか言うのをやめない。

うん。仕方ない。

これでは僕の精神衛生上、とてもよくない。

というわけで、強硬手段に訴えることにした。

だらしなく開けられている口に角煮を放り込んでやったのだ。

一瞬何が起こったかわからないという様子で、人はは目をパチク  
リさせる。

一通り何が起こったのか整理がつくと、猛然と抗議してきた。

「ちょっとー。いきなり放り込まないでよ！窒息するかと思ったじやんー！」

「……………でも、美味かつたろ？」

「そんなのわかるわけないじゃん。飲んじやつたし。味わう暇なんてなかったんだもん」

「……………食べるか？」

いやらしくニヤリと笑って「仏の顔も三度まで」と付け加えてやる。？マークを浮かべたような表情を浮かべる一葉だったけど、すぐに意味を理解して再び唸りだす。

「……………太つたら、お兄のせいだからね」

恨みがましい視線で僕を睨んでくる。そんな一葉に「はいはい」を苦笑して返事を返した。

「もう一口だけ、頂戴」

「ん。了解。ほれ、あーん」

でもさすがに、さっきから文句ばかり言われたので、ちょっと悔しい。我ながら、大人気ないと思うけど。

というわけで仕返しとばかりに一口大に切った

角煮をつかんで一葉の口元に持っていった。

「お兄……………それ、すっごい恥ずかしいけど……………というか、気持ち悪い？」

「そうか？ 別に兄妹だし、恥ずかしがることないんじゃないか？」

そうやってニヤニヤしていると面白いくらいに一葉の頬に赤みが差す。

しかし、そこで終わらないのが我が妹らしい。

僕の顔を見て、よほど悔しかったのか、箸の角煮にパクついてきた。

「あー美味しかった。ありがとね。『お兄ちゃん』？」

そう満面の笑顔で言われると、逆に今度は僕が照れる番だった。

「あー『お兄ちゃん』。赤くなってるうー」

と、もうすっかり言わなくなった『お兄ちゃん』という言葉を強調

して言ってくる。

自分も恥ずかしいだろうに。その証拠に、頬は相変わらず赤い。でも結局、お互い羞恥心が限界を迎えたのか互いの視線が合ったとき、「もう限界」と笑いはじめた。

かなり遅めの夕飯が終わり、僕はテレビを見ながら聞き耳を立てる。

後ろでガチャガチャと危なっかしい音をたてながら、一葉が食器と格闘しているからだ。

なんでも、『結局食べちゃったからその分のカロリーは消費しないと』らしい。

「もうちょっと丁寧に扱えよー?」

「わかってる!」

と煩惱返事する一葉だけれど、やっぱり音の大きさは変わってない。

正直なところ、一葉は家事が得意ではない。

もっとも、まったく出来ないというわけではなく、雑というかテキトーというか、そういう言葉がしっくりくるような感じだ。

まあ、生まれ持った質というか性格というか、精密作業や同じことを繰り返す単純作業が苦手なのだ、一葉は。

それでも、苦手なことでも嫌がらず いや、むしろ楽しそうにやっているあたりが一葉らしいといえ、一葉らしいのかもしれない。

「さてと。見たいテレビもあるわけじゃないし手伝うぞ?というか、手伝わせる」

「はいはい。じゃあ、洗い終わったの拭いて」

「了解」と

狭くもないが、決して広いともいえない微妙な広さの台所に兄妹、二人して立つ。

「……お前、洗い方ちょっと雑過ぎないか?」

「うっさい。汚れが落ちればいいの、落ちれば!」

ちよっとムツツとする一葉。確かに、言うことはもっともなのだ

けれど、中には完全に落ちきっていない油污れもあったりする。

「お前さ。結婚したら、お姑こいぢさんに苛こめられるぞ?」

「そんなところになんか嫁がないから大丈夫。というか、あたし、まだ高たかいだよ?結婚なんて早い早い」

「そうか?今時、僕らと同じくらいの年齢で結婚する人たちだって少なくないと思うんだけどなあ」

「そうかもしれないけど、あたし的には違うの! というか、相手もないのに無理でしょ」

驚きだった。サバサバした性格故ゆえか、一葉は男女ともに人気がある。

それに、同じ高校に通っているからこそ分かることだけど、何度か男子生徒と仲睦まじく会話しているところだって見たことがある。

ついでにいうと、同じクラスの何人かに一葉との仲を取り持つてくれと頼んでくるやつもいた。

つまり、彼氏を作ろうと思えばいつでも作れるということだ。

「でも、好きなヤツくらいはいるんだろ?」

「そんなの、いない」

「そうか? 男おとこつ気ありそうなんだけどな、お前」

「それを言うんだつたらお兄はどうなの?」

「僕?」と首をかしげる僕に、じとーっとした目つきで、一葉が切り返してきた。目が「あたしの事ばっかでフェアじゃない」言っている。

正直なところ、それを聞かれると痛い。

恋愛には人並みに興味はあるし、飯島や他のクラスメイトともそういう話をしないわけでもない。

ただ自分の今の状況を考えると、とてもじゃないがそういうことに時間を割けるほどの余裕がない。

自分には無理。向いていない。

そういう考えが脳裏によぎる。

勉強や趣味、特技に向き不向きがあるように、

恋愛にも向き不向きがあると、僕は思う。

僕には、向いていない。

自分のことに精一杯過ぎて多分、付き合っただとしてもすぐに別れてしまっただろう。それによって相手が傷つく。それだけはなんとしても避けたい。

幼いときの母さんのような真似だけはさせちゃいけない。

アイツ父親と同じにはなりたくない。

「お兄？」と怪訝けげんそうな顔をして黙り込んだ僕を見る一葉。

僕は、胃の辺りがムカムカしてくるのを表情にださないようにして無理やり笑顔を作って、言った。

「今の所は、いないよ」

女ツ気ないしね、とついでに冗談めかして。

「ほら、お兄だってヒトのと言えないじゃん」と一葉は笑った。

その笑顔に、若干癒されながら「そうだね」と今度は心から笑った。

ガラガラと、玄関から音がする。

「あ、お母さんだ。おかえりー」と一葉は駆けて行った。

「うっわ、お酒臭あ……。飲んできたの？」

「会社の人たちと、お付き合いでね」

「ほれ、水」

「ありがとう、あーくん」

完全に舌足らずな口調で、しかもいい子いい子と頭を撫でる我が母。

正直、やめて欲しい。というか、こんな泥酔状態ということは、少なくとも一人で帰ってくるはずがない。

母さんの後ろを見ると、家の前で停まるタクシーから、荷物を持った男性が歩いてくる。

「夜分遅くにすまないね、晶君」

「いえ、別に。母さんを 和葉かずはを送っていただいてありがとう」

「ございます、彰人あきひとさん」

と母さんに撫でられながら苦笑して言う。

母さん 藤枝和葉を送ってくれた、彰人さんというのは、母さんの会社の同僚で、本名は倉橋彰人くらはしあきひとという。

身長が高く、線も細くて一見すごく若そうに見えるが実は母さんよりも3つ上という、オジさんだ。

僕の間から言わせれば、オジさんというよりも、お兄さんという気がしないでもないのだけれども、時折見せる姿がなんというか実にオヤジくさい。

「汚いトコですけど、上がってきます?」

「いや、いいよ。タクシーも待たせてあるしね」

「はあ、そうですか」

「また今度ゆっくりさせてもらおうよ」

飲んだ後とは思えないほどのしっかりした足取りで彰人さんはタクシーに乗り込んでいく。

僕らはそれを最後まで見送った後、穏やかな寝息を立て始めている母さんを抱き上げて寝室へと運んだ。

気づけば秒針は0時を回っていた。

結局今日も日常を繰り返すばかりで、何をするわけでもなく終わってしまったというわけだ。

『はじまり』と言えば『始まり』だったのかもしれない。

例えば錆びついて動きが鈍くなった歯車に油を注すと、ぎざぎざ、ぎざぎざと不協和音すらあげていたその動きが途端に良くなるように。

あるいは、ずっと芽が出ない花の種に水をやり続け、ふとある日『いつものように』水をやるうとしてみたら、ちいさな芽が産声をあげていつように。

『始まる』きっかけは突然で、思い返せば本当に何気ない、呆気<sup>あつけ</sup>なさすら感じるもので。

「まあ、俺も藤枝の『家の事情』は知ってはいるがな。だが、そういう事情があるからこそ、もっと自分の将来の事について考えなければならぬんじゃないのか？」

日はすでに傾きはじめている。日の入りが遅いとはいえ、差し込む夕陽によって今居る教室は緋色に染まっていることから時計を見なくてもそれなりの時間だということくらいはわかる。

誰も残っていない教室内で、僕は担任の藤川先生と学年主任の斉藤先生にお説教兼進路相談を受けている真っ最中だ。とは言っても、

主にしゃべっているのは斉藤先生だけで、担任は斉藤先生の話のところどころにうなずいているだけだ。

担任の藤川先生は相変わらず陰が薄い、それとは対照的に斉藤先生は存在感を露あらわにしている。

もつとも、それくらいでないと学年主任というポストは勤まらないのかもしれないが。

「……たく。もう少し夢とか、やりたいこととかないのか、お前は」

「……ないです。まあ、しいてあげるなら、早く就職して独り立ちしたいですね」

「就職って言ったってなあ……。別に言わなくてもわかってると思っただけ、高卒で就職はかなり厳しいぞ？」

当然、知っている。学歴や技能・才能がモノを言う時代だ。昔と違って、多少学歴などが低くても……。という事じゃないくらい知ってる。でも

「そりゃ就職できないとは言わない。けどな？既に遅れてるんだよ、お前は」

「どついつ、ことですか？」

「他の学校、例えば商業高校や工業高校じゃ、」

もう結果（就職先）が決まっているとこだってある。今、この瞬間、『そこに就職したい』と必死で就職面接受けてる。酷な言い方かもしれないが今から就職活動したんじゃ、おそろく間に合わん」

現実には甘くない。そんな言葉が似合う状況だ、と僕は自嘲した。

「だから、まずスタートラインに立て」

斉藤先生は無精ひげの生えた口元を歪ませニヤリと笑った。

「何も今すぐ夢ややりたいことを見つけて言ってるわけじゃない。そんなもんはな、後付けでいいんだよ。後付けで」

僕は頭の上に？マークを浮かべ、言葉に詰まる。確かに、今すぐやりたい事を見つけてといわれても無理な話だ。だからこそ、今こっぴど呼び出しを食らっているわけだ。

さぞ滑稽な顔をしているんだろう。

失礼なことに、目の前の学年主任は僕を見てさらに笑みを浮かべている。

「そりやお前の家が事情を抱えてるって事は良くわかる。だけど、それがなんだ？別に、藤枝の家だけじゃないんだぞ、そういうのを抱えてんのは」

「ッ」

「多分、俺の主観だけだな。お前がすぐにでも働きたいなんて考えてるのは、お袋さんのためなんだろ？」

当たっている。自分の身一つだつて支えるのが大変なのに、母さんはそれを二人分余計に背負っている。だから、せめて自分の世話くらいは自分で見る事ができるようになりたい……くらいは考えているつもりだ。

斉藤先生は僕の沈黙を肯定ととつたのか、「やっぱりなあ」と小声で呟く。

「高校生つたつて子どもじゃないんです。親に負担や迷惑をかけないのが当たり前じゃないんですか？」

なんとなく悔しくなつて、斉藤先生をキツと睨んで語気を荒げて言う。

それが凶星を突かれての八つ当たりだつていうことはわかっていて。我ながらなんとも情けないと思うし、子どもじゃないといつておきながら、思いつきり子どももっほいと思う。

けど、何か言い返さずにはいられなかったのだ。「でも大人でもないだろ？」と斉藤先生は急に真面目な顔をして言った。

「あいな？確かに子どもじゃないのかもしれないし、今までの藤枝の言動にしても、親くらい年の離れてる俺の目からしてもお前は立派だつて思うよ。けど、親の立場からしてみると、子どもはいつまで経つても『子ども』なんだよ。だからな？」

子どもに掛けられる迷惑は、ちつとも負担なんかじゃない」

「 けど」

「『晶はもう少しわがママを言って欲しい』だそうだぞ?」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。それが母の言葉ということに気づくまでしばらくかかった。

「今日な。お仕事で迷惑だと思ったが、一応お前のお袋さんに連絡を取ったんだわ。あんまり長いことは話せなかったんだが、簡単に事情を説明したらそんな返答が返ってきた」

「母さんが、本当にそんなことを?」

「ああ。良いお袋さんじゃないか。ま、この親にしてこの子ありつてことがよく分かるな」

そういつて、ニヤリとまた口元を浮かべる斉藤先生。でもそれ以上に、母さんがそんなことを言っていたことに、かなりびっくりしている。

「 大学進学、考えてみたらどうだ?」

ここからが本題、と言わんばかりに、斉藤先生が身を乗り出して問う。

「幸い、お前の三年間の成績を見る限りは、決して悪いものじゃない。むしろ、優等生の部類だ。お前が希望するなら、ウチの学校としても推薦していいくらいに思ってる」

冗談めかして言うが、あながち冗談でもないらしい。相変わらずニヤニヤしているが、目は真剣だというのが分かるからだ。

まったく。『目は口ほどにモノを言う』とはよく言ったものだ。

「さっきの話にもつながるけどな。今すぐやりたいことを見つけないければならんわけじゃない。

結果の先延ばしって言うっちゃアレだが、少なくとも先の見えない就活を迎えるよりも、ちゃんと学歴を積んだほうがより明確じゃないのか?自分の時間がずっと取れる大学生なら、もしかしたら『答えが見つかるかもしれないぞ?』

考える。

正直なところ、大学に行くことを考えなかったわけじゃない。で

も

「お前が考えてるのは学費とかそういうのだと思うが、まあそれはお前さんの努力次第でなんとかなると思う」

「え？」

「奨学金制度があるだろう？実績があれば、お前の言う『親の負担』にはならないんじゃないのか？」

考える。

考える。

考える。

将来の事、自分のこと。

やりたい事。

夢。

ぐるぐると、考えが渦巻く。

「ま、ゆっくり考える。つて言っても入試の願書提出まで、早くて3ヶ月きってるから、あまり考える時間はないかもしれんがな。それと、お袋さんにちゃんと相談しろよ？こういうことの」

ガタリ、と椅子が動き、斉藤先生とやはり陰の薄い担任・藤川先生が立ち上がる。

背を向けて、「じゃ、解散」と手を振って斉藤先生は教室を後にした。

落ちかけの太陽が、部活で残るサッカー部員やら野球部員やらを茜色に染め上げる。

しばらく外を眺めたあと、僕は荷物を手にとって電気を切って教室を出た。

## chapter 1 - 1 (前書き)

前回投稿からだいぶ日付はあいてしまいました。  
遅筆で申し訳ありません。またよろしく願います。

夏。

それは受験生にとって文字通り汗滲む季節だ。肉体的にも精神的にも。

一応一ヶ月間の夏休みはあるけれど、その一ヶ月も任意参加という名の必須受講の夏の特別対策授業で消えて無くなるのだ。

名門大学を目指す生徒は当然として、一人で勉強できないタイプの生徒や克服すべき分野が多いために先生なしでは勉強できない生徒は問答無用で学校に出でくることになる。

でもまあ。

進学するつもり of 学生は、全て出校していると言ってもいいだろう。

だから当然、前回の面談以降『一応』進学と決まった僕も毎日のようにこの対策授業に参加しているわけだ。

とは言っても、僕自身はまだ行くべき大学や、目指す方向は全く決まっていない。

自分でいうのも何だが、これでいいのか受験生って感じた。

「いや〜、あつついなあ今日も」

ノートをうちわ代わりにしてパタパタと扇ぎながら飯島が近づいてきた。

「そうか？ちょっと寒いぞ、この教室」

クーラーがガンガンに効いているわけじゃないが、半袖にはちょっと堪える。クラスメイト 特に一部の女子は、膝掛けまで持ってきているのを見ると、肌寒く感じるのが僕だけじゃないと言つことが分かるだろう。

「シヨウ君、ちょっと来い」

ぐいっと抱きこまれ、僕たちはまるで二人三脚をするように教室の入口まで歩いていく。

そして、勢いよく飯島は扉を開け放った。

「うわぁ……………」

思わず僕はそう呟いていた。

ムツとした、湿気を含んだ熱気が身体中を包み込む。

今日の日中の最高気温が37度。

エアコンの設定温度が25度　その12度の気温差で、一瞬にしてじっとりと汗をかく。

額に汗をすこしだけ滲ませながら「だろ？」と飯島は言った。

「わかったか？この俺の気持ちか」

「うん。っていうか、外ってこんなに暑いんだ？　今日はずっと

この教室だから。まさかこんなに暑いとは思わなかった。

朝は涼しいくらいなのにな」

「ここ最近はずばっかだったからなあ。なんか急に暑くなったって感じがするわな」

「だな」

心から飯島に同意する。

ニュースの天気予報で梅雨明けが発表されたのは、まだまだ記憶に新しい。

ここ数日は本当に晴天に恵まれているけれど、夕立や急な通り雨で路面が濡れて路面がゆっくり温まっていく朝方はその蒸発で涼しくなる。

僕の家から学校まで、すこし距離があるため朝方家を出る時はちよつと肌寒く感じるのだ。

「っていつかさア。もしかしてシヨウ君、ずっとこの教室？」

「うん？　そうだけど」

飯島の問いに、僕は小首を傾げた。

「シヨウ君てば、一応進学組なんだよなあ……。なんでこつちいの？」

『こつち』とは今年の大学入試センター試験やその先の二次試験に重点を置いた『受験対策講座』ではなく、どちらかと言えば今までの総復習的なものを学ぶ『苦手克服講座』のことを指す。言わずもがな。前者が飯島の受講している方で、後者が僕が受講している方だ。

飯島が疑問に思うのも当然か、と僕も思う。苦手克服講座はどちらかと言えば受験対策というよりも日々の授業対策と言っている。

すでに高校三年生ともなると、新しく覚えることなどないし、むしろ今までの知識を活用して問題を解くことが多いくらいだ。だから、今までのことが出来ていないと、日々の授業がかなり大変だということになる。

ありていにいえば、この講座はそういう生徒たちに、特に理解してもらえようように設けられた講座なのだ。

一方受験対策講座は今までの傾向から今年の傾向を予想して各分野の先生たちが独自に問題を作り、出題し、それに対する講義をする。文字通り『受験対策』。どちらが受験を目指している生徒に適しているかは推して知るべし。というやつだ。

だから、飯島がその疑問をもつのに理解も納得もできる。

「苦手分野、多いんだよ。実は」

あはは、と頬を掻きながら、僕は言った。

嘘ではない。でも本当のことでもない。でもなんとなく、それが飯島にウソをついているようで気分が悪くなる。

飯島は「ふーん」と納得したんだかしないんだかどちらかわからない返事をして、時計に視線を移した。

「おおつ。ヤバ。 んじゃ、またあとでな！」

そう飯島はというと、自分の席の横に掛っている鞆から次に使うだろう教科書を取り出し、小走り気味に教室を出て行った。

入れ替わるように、担当の先生が教室に入ってくる。

雑談のざわめきも徐々に沈黙していき、授業が始まる。

僕は一度外に視線を移した。

空は、相変わらず気持ちいいくらいに青々としていた。

## chapter 1 - 1 (後書き)

感想などありましたら、よろしくお願いいたします。

ポケットの中で、携帯電話がブルル、ブルルと振動している。もそもそと携帯電話を探り出して手を取り、画面を見る。

携帯電話のディスプレイには飯島の名前が映し出されていた。

「……………何か用か？」

『うわぁ、一言目がそれかよ。酷え言い草だわ！数年来の親友様に向かってよぉ。で、どこに居んの？』

自分で言うか？と内心思いつつ、僕はため息を吐きながら「どこって、屋上だけど……………」と言った。

『なんでそんなとこに居んのさア』

案の定、飯島の呆れたという声が電話口から聞こえる。

まあ、飯島が呆れるのも分からないでもない。このくそ暑いのに、わざわざ外にでる物好きがどこにいるんだっていう話だ。

「ちよつと部屋、クーラー効きすぎで寒いんだよ」

『あー。なんかさつきもそんなこと言ってたな……………。屋上だってよぉ、シヨウウ君の居場所』

えー？屋上？ あれ？屋上なんて行けたっけ？

飯島の電話から、西村さんの声や、他にも『この暑いなか信じられない』という数人の声が聞こえる。まあ、いつも一緒にご飯を食べるメンツだろう。

この時期、天文部の活動で普段は開かずの間となっている屋上が解放されているのは、意外に知られていない。

ある意味秘密基地のような場所だ。

しかも、一見直射日光が当たって暑苦しい場所に思えるけど、実は貯水タンク（？）みたいなものがあるおかげで日中は日陰が多く意外に涼しい。

だから、冷えすぎた身体を温めるにはちょうどいい場所だった。

「で。何かご用がお有りなのですか？伊織君」

『や、名前で呼ぶの止めようぜ。っていうかそう！用だよ用！っていうか分かるだろ？メシだよメシ！』

「メシなら食べてるぞ。 現在進行形だし」

『 はあっ!?!? 』

「そーゆーわけだから、切るぞ」

『 薄ッ情おな奴だな。あ、さては今日のメシ 』

最後まで飯島の奴が言う前に、電話を強引に切ってやった。

勿論、クーラーで身体が冷えたのは本当のことだ。でも一番の理由は、この目の前に広げられている……もとい、広げた妙に豪華そう、それでいて可愛げのある弁当箱だった。

基本的に僕の高校でのご飯にありつく方法は3つある。

ひとつは学食。

もとは先生用に作られたらしく規模はあまり大きくない。だが一応学生も利用できて、それなりに安価で食べられる……のだけれど、席の確保が難しくいつも混んでいる。

次は学食に併設された、テイクアウトスペース。

おにぎりやサンド類、弁当類がある、イメージとしてはコンビニに近い。

こちらの方が学食よりも学生に人気で、目当てのモノを買おうとするお昼前の授業後には必ず並ぶ。

人気のヤキソバパンなどは個数が限定されていて、僕も入学してからまだ数度しか食べたことがない。

そして最後はお弁当組だ。

もっともはやくご飯にありつくことができる。

女の子たちはだいたいお弁当で、教室や外が涼しい時は中庭などで昼食をとっている。

そして、僕もお弁当組の一人だった。

なぜかという、もちろん家計に優しいというのも一つの理由なのだけれど、年中仕事のある母さんは、毎日のお弁当をもって出勤する。

とは言つても作るのは母さんではなく、僕か、妹の一葉だ。

母さんの出勤時間は早いわけではないけれど、でも最低限のメイクや身支度をしていると時間がかかるらしい。

また、藤枝家では昼も夜も全員が一緒に御飯がとれるわけじゃないので、せめて朝だけは家族の団らんとして一緒にとろうというルールがある。

お弁当に至つては、最悪それを詰めちゃえばいい のだけれども、さすがにそれだけだと飽きちゃうので、軽く味付けを変えられるものは変えたりしている。

僕だったらそれで満足して詰めちゃうのだけれど、それを許してくれない鍋奉行ならぬ弁当奉行（？）がいる。

それが、一葉だ。

一応兄妹そろつて居酒屋『のんだくれ』でアルバイトをしているおかげか、まかない料理的な感じでパツとアレンジするだけのスキルは学んだ。

バイトしたての頃こそ僕の方が腕的には上だったけれど、今では一葉の方が一枚も二枚も上手だ。

やたらと飯島夫妻 とくに涼子さんが 一葉のことを構う。伊織というよりも親子らしくみえるくらいだ。

手のあいた時間は直々に大将や涼子さんから手ほどきをうけているお陰で、まさに腕のほうは鰻登りだ。

まあそんなこんなで、料理人気質が身につけてしまったわけだ。

言わずもがな、料理は見た目から、というヤツで、中身が輝いてみるように見えるほど綺麗に並んでいる。ただ、弁当箱がアイツの趣味というかなんというか。

こう、男が持つにはちよつとアレなのだ。

一応やつてもらっている手前、文句は言えず我慢しているわけだけれど、うん。

同年代には見られたくないというのをわかって欲しい。

あともうひとつ。

この弁当を狙う伊織ハイエナがいることも忘れちゃいけない。

アイツに奪われたおかずは数知れない。

しかも、実家が実家だから舌が肥えているのにも関わらず。

そういう意味合いも兼ねて、こうやって安息の地でご飯を食べるといっわけだ。

切った電話をポケットにしまい、再び箸に手を伸ばす。

その瞬間急に真上が曇り、そしてにゅっと伸びてきた手におかず

それも一番楽しみにしていたから揚げを 掻っ攫われた。

「……………おい」と、僕は肩をわなわなとふるわせて上を見上げた。

「なんだよー。たかが弁当だろ？ そんなに怒んなって」

そう言っつて、そいつはむぐむぐと一口に咀嚼しごくりと飲み込んだ。

「たかが？ 今日の力作スペシャルなんだぞ？ それを……………それを」

「ざーんねん。もう飲み込んだじゃいました。ごちそうさま。っ

ていうか、場所提供してやってんだからそれくらいいいだろ？」

うぐ、と僕は言葉に詰まる。屋上の扉の鍵をあけるには天文部の

協力が 鍵を預かる部長の協力がいる。

「まだ残ってるからいいじゃねーか。なんなら、もうひとつ食って

やってもいいんだぜ？」

にやりと端正な顔をまるでどこかの悪役みたいに歪ませる。

「……………くそう。覚えてろよ。水前寺玲ハイエナめ」

それが、この屋上のもうひとりのハイエナ。天文部部长・水前寺玲ハイエナだった。

## chapter 1 - 2 (後書き)

感想などありましたら、随時募集中です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5552f/>

---

風見鶏は/一体なにを/見つめるか

2010年10月27日13時40分発行